

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

1980年代のサーランギ音楽の共有化＜基幹研究：
ネパールのガンダルバ映像音響資料に関する情報共有型データベースの構築＞

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2020-10-01 キーワード: 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15021/00009585 |

1980年代のサーランギ音楽の共有化

文・写真 南 真木人

プロジェクトの目的

このプロジェクトは国立民族学博物館（以下、民博）が所蔵する、ネパールの楽師カースト、ガンダルバの人びとによる弓奏楽器サーランギの演奏と歌の音源や動画、写真（諸般の事情でデータベースに未掲載）をコンテンツとした、情報書き込み可能なデータベースを作成し公開するものである。貴重な1980年代のサーランギ音楽の音源を、当事者を含むネパールの人びとや世界中の研究者と共有することを目指す。民博には、民族音楽学者である藤井知昭民博名誉教授を代表とする科研費「東西音楽交流学術調査」隊（1982年ネパール、1984年東ネパール、1986年シッキム・インド、班員は樋口昭、高橋昭弘、鈴木道子、馬場雄司、山田陽一、石黒淳）が録音したサーランギ音楽のカセットテープ音源（複製）がある。これをデジタル化して奏者・曲ごとに分け、現時点で59人の奏者による177音源からなる英語のデータベース「Sarangi Music in Nepal」を作成した。

プロジェクトの経緯は南（2018）に詳しいが、1982年に民博がネパールで撮影した映像作品を、被写体となったガンダルバの当事者に2016年に提供したことから始まる。その際、34年の変化を調査し、映像を再び撮らせてもらって新たに3つの映像作品（南・寺田・藤井 2019など）を作成し公開した。その過程で、藤井名誉教授の意向のもと、サーランギ演奏の音源と写真も当事者に提供するとともにウェブ上で公開して共有しようということになった。

プロジェクトの共同研究員は、1980年代の調査隊員であ



バラト・ネバリ。1982年に録音した曲を再演してくれたため、聞き比べが可能になった（2018年、カトマンドウ）。

った馬場雄司（京都文教大）、伊藤香里（サーランギ奏者）、森本泉（明治学院大）、今井史子（北海道大）、寺田吉孝（民博名誉教授）で、データベース作成に留まらず、これを機に過去30数年のガンダルバ社会とサーランギ音楽の変化を共同で研究しようと組織された。その成果の一部は、南ほか（2018）に示したが、本稿ではあまり例のない音源のデータベースについて紹介し、1980年代のサーランギ音楽が持つ意味を考えてみたい。

データベースの素材と構成

民族音楽学者が研究用に録音した音源の特徴は、最初に音義 A の基準周波数音と録音年月日・採録地が必ず入り、全曲が最初から最後まで完全に録音されていることである。また、何人かの奏者にはサーランギの4弦の開放弦の音や音階を弾いてもらい、曲の解説なども収録されている。録音する曲は奏者に任せられ、奏者が弾きたい2~3曲が選ばれている。そのため、当時流行していたと思われる「カーツォ・カタラ（青いパイナップル）」という曲は14人の奏者が弾いており、聞き比べることができる。

ネパールの民俗歌謡（ロク・ギート）には曲名をつける習慣がなかった。1951年にラジオ放送が始まり曲名紹介の必要性が生じたり、音楽カセットテープの販売に際してレーベルに曲名を記載したりするなかでしだいに曲名が生まれてきたのだ。多くの曲名は冒頭の数小節の歌詞、あるいはいわゆるサビの繰り返し歌詞を由来とする。とはいえ、歌詞のどこからどこまでを曲名とするかは奏者によって異なり、同じ歌詞で同じ旋律の曲でも曲名にばらつきがある。データベースを作成するにあたっては、混乱を避けるため、曲名を統一するようにした。ただし、調査隊が奏者から聞き取った曲名も原曲名として併記し残した。他方、同じ旋律だが異なる歌詞で歌われているものは、曲名も異なるので別の曲とみなした。

データベースのコンテンツには、民博の資料番号、データベース作成時につけた音源固有のファイル名、演奏時間、奏者名、ジャンル、曲名、録音年月日、採録地、採録者、カセットテープ番号、原曲名、調査隊が報告書などに記載した原注、データベース作成者による備考という項目を挙げ、書き込み可能なコメント欄を設けた。調査隊の報告書に採譜や歌詞の日本語訳がある曲については、原注で示した。データバ

南 真木人（みなみ まぎと）

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。専門は人類学、ネパール研究。共編著に『現代ネパールの政治と社会—民主化とマオイストの影響の拡大』（明石書店 2015年）、分担執筆に「移住労働が内包する社会的包摂」名和克郎編『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相—言説政治・社会实践・生活世界』（三元社 2017年）など。

ースには、全表示、テキスト検索、奏者、ジャンル、採録地、録音年代から入ることができる。ジャンルは、映画音楽、英雄叙事詩（カルカ）、民俗歌謡、ヒンドゥー神話、出来事（ガタナ）、形而上学的な歌（ニルグン）、ネワール語曲、作者が判明しているオリジナル曲の8つに分類した。

サーランギ音楽の宝庫

調査隊が集約的に調査したバトゥレチョールは、ガンダルバの故地とされている。そこでサーランギを弾けると申し出て録音に協力してくれた36人の男性奏者の演奏と歌は、きわめて多様であり、その多様性自体が貴重である。そこには当時60歳の長老による英雄叙事詩から12歳の少年の民俗歌謡まで、また調弦ができていない初学者、ないしは日常ほとんど演奏していないが謝礼目当てに参じた成人の拙い演奏、サーランギの伴奏で歌う若い女性の歌声なども含まれる。ガンダルバの生業であったサーランギ演奏と歌が、バトゥレチョールにおいて誰にどのように伝承されてきたかを知ることができる貴重な資料だ。

他方、カトマンドゥ盆地内のバクタブル、キルティブル、デオパタン（バシュパティナート）というネワール人の都市にあるガンダルバの小集落でも調査が行われた。そこでは王宮儀礼においても演奏していた古老の奏者による、現在ではほとんど演奏できる人がいなくなった形而上学的な歌（ニルグン）が収録されている。また、ネワール語で歌う4曲からは、ガンダルバの人びとがいかにネワールの音楽文化を取り込んできたかがみとれる。

1980年代初めとは、ネパールに多くの外国人ツーリストが訪れるようになった時期であり、村々を歩きまわって歌を聞かせていたガンダルバの生業が、外国人ツーリストに歌を聞かせ、サーランギを売る形に転換した頃にあたる。この過渡期のサーランギ音楽を集積した本データベースには、伝統的な曲と新しい形態の曲の両方が含まれ、サーランギ音楽の変容の過程を示す宝庫と呼ぶものになっている。とくに、時代や世相が歌詞に反映される語りのパート（トゥッカ）などは、現代のネパールの人びとに懐かしさと暮らしの原点を思い起こさせるものとなる。データベースにも含まれる国民的歌手、ジャラクマン・ガンダルバ（1935-2003年）のような巨匠の演奏音源は、地元のラジオ局にも残っているかもしれない。だが、少年など無名のガンダルバの演奏が広域



34年前の映像作品の里帰り上映会。泣いて、笑っての2時間となった（2016年、バトゥレチョール）。

に包括的に録音されていたことは、民族音楽の研究ならではの偉業であり、ネパールにとっては国民的な文化財となりうるものである。改めて藤井名誉教授をはじめとする調査隊員に敬意を表したい。

データベースの公開と充実に向けて

データベース「Sarangi Music in Nepal」は、2020年7月現在、未公開である。それは、2019年度末に予定していたネパール出張が新型コロナウイルス感染症の拡大で延期となり、奏者ないし、その遺族との間でウェブ掲載許諾の覚書を取り交わしていないためである。また、ネパールから研究協力者を招聘して、曲や人物の同定と曲名の再確認を行う予定であったが、これも渡航制限によって実施できなかった。状況が落ち着き次第、これらの課題を解消し、データベースを公開したい。なお、30数年の変化をみるため、2016～2019年に22人の奏者（バンドを含む）による約60曲の動画を撮りためてきた。しかし、予算と時間的な制約から1人の奏者（左写真のバーラト・ネバリ）による3曲の動画しかデータベースに収めることができなかった。これも追って補充し、30数年来のサーランギ音楽研究の集大成といえるようなデータベースに発展させていきたい。

引用文献

- 南真木人 2018「過去の記録映像を現地に返す」『季刊民族学』163: 4-6。
南真木人・寺田吉孝・藤井知昭監修 2019「ネパール 楽師の村 バトゥレチョールの現在」『みんなく映像民族誌第30集 ネパールの楽師ガンダルバ』（日本語、92分）。
南真木人・馬場雄司・藤井知昭・寺田吉孝・伊藤香里・森本泉・今井史子 2018「特集 ヒマラヤの吟遊詩人ガンダルバの現在」『季刊民族学』163: 3-62。